

第8回日本小児麻酔学会 (名古屋)

堀本 洋*

まだ残暑の残る名古屋国際会議場において、9月6日(金)、7日(土)の二日間、島田康弘名古屋大学教授のもと、「小児麻酔の現状と展望」という主題に沿って日本小児麻酔学会第8回大会が開かれた。この会場では再来年5月、第51回日本麻酔科学会が開かれる予定になっている。

沖縄あたりに停滞した台風のために沖縄からの演者が到着できなくなり、2題一般演題がキャンセルされたことは大変残念なことであった。突然の大雨も短時間ながら降ったが、いったん会場に入ってしまうと、会場内の移動は雨に濡れることなくできることは参加者にとって大変好評だった。その2題を除き84題の一般演題が全てポスターで展示された。他に、「小児周術期ペインコントロール」をテーマとしたシンポジウム、「小児気道管理の工夫」をテーマにしたワークショップが開かれ、大いに討論された。今回の運営でシンポジウム、ワークショップが開かれたメイン会場にたくさんの参加者が集中し、大いに討論が盛んだった理由に、特別講演、招待講演、サテライト講演、一般演題との重なりがなく、参加者のほとんどが会場に集まってくれたことが考えられる。教育セミナーではポスター発表との重なりがあったが、最小に抑えられていると感じられた。

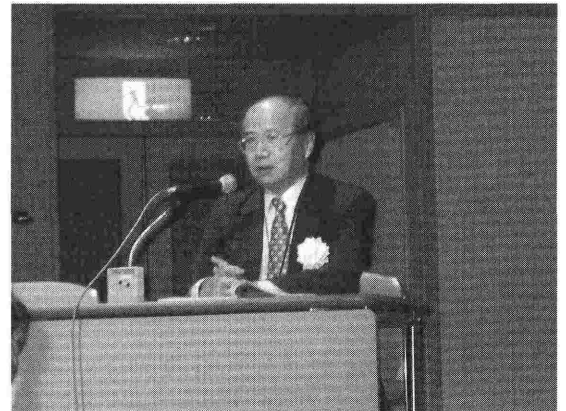
この学会ならではの特徴を紹介する。まず日本での小児麻酔のパイオニアと称せられる故岩井誠三先生を記念して、先生とゆかりの深い方々に岩井誠三記念講演として講演していただく。今年はロスアンジェルス小児病院関係から、小児麻酔の権威とも言われる Frederic A Berry 教授に講演していただいた。

次に教育セミナーという小児の麻酔をやる上で

必要な知識をその道に長けた方に講義してもらうが、その時間は30分であるため、聞いている方の集中がとぎれない、という長所がある。講演者にとっては時間が短く制限されているために話しづらいつらいという面はあるかもしれないが、小児麻酔学会員には好評である。

またポスター発表の際、ポスターの演者にまとめを発表させない、というのがある。これは第7回会長の宮坂先生が始められたが、座長がポスターを口頭で要約し、すぐに討論を始めることである。他学会で時々見かけるのが演者によるガラガラとした発表で、討論が十分されないことがある。その欠点を補っているのではないかと思われる。

また今回の学会の大きな特徴として考えられるのは、シンポジウム、ワークショップに米国からの講演者にコメンテーターとして参加してもらい、コメントをいただいたことと討論の際に英語の得意でない会員のために同時通訳者を入れたことであろう。そのことにより細かいところまで皆



壇上で司会される第8回日本小児麻酔学会長の
島田康弘名古屋大学教授

*静岡県立こども病院麻酔科

で討論できたことは演者にとっても、会員にとっても有益なことであると思われた。ただコメンテーターのためにスライドを英語にし、あらかじめ同時通訳者に発表内容を提出しなければならないことは演者にとって少々の負担であったかもしれない。

招待講演の中では心臓手術の麻酔に区域麻酔の併用について講演されたスタンフォード大学の Dr Hammer の話が印象的だった。手術室で抜管できることによる医療経済の面や術後鎮痛の面から、硬膜外やくも膜下にモルヒネを投与する方法を紹介した。氏はやはり出血の可能性を考慮すると、硬膜外腔よりくも膜下腔のほうが好きだ、と述べていた。

心臓麻酔関連演題は15題と、全体の17.4%であった。いつもこの学会は心臓血管麻酔学会と日程が近いためどちらの学会に出そうかとためらわ

れるかもしれないが、討論参加者が必ずしも一致しているわけでもないので、同じ演題の内容を少し変化させて、別々の学会に出しても違う討論が発展する可能性もありおもしろいのでは、と考えるが、どうだろう？

市民講座は小児科開業医による「子供の事故を予防する」と医局員による「小児救急蘇生の実際」が講義されたが、86名の市民参加者があった。

有料参加者は268名で、他医局員、招待者などを加えると全体で340人が参加されたようだった。

なお器械展示はやはり日本麻酔科学会に比べると盛り上がりには欠けたが、医療器械業者には小児麻酔学会をもっと盛り上げるためにももう少し多くの業者が参加してくれることを望む。

来年の小児麻酔学会は2003年9月13日（土）、14日（日）の二日間、福岡市立こども病院麻酔科部長、秦 恒彦会長のもとに福岡市で行われる。